

## 第四十節の隠された歴史——第十番

### 中間点

Jeff Pippenger

2026-05-14

ダニエル書第十一章四十節の隠された歴史は、同章十節から十六節に示されている歴史と一致している。十節から十六節においては、黙示録第十三章の地の獣、すなわち合衆国の背教した共和党の角の系統がドナルド・トランプによって表されており、合衆国の背教したプロテスタントの角の系統がマカベヤ人によって表され、教皇制という海の獣の系統は「あなたの民のうちの強暴な者たち」として表され、竜の系統は南の諸王およびマケドニアのフィリッポスによって表されている。十四万四千人の系統はペテロによって表されている。

### 中間```

その隠された歴史の中において、中間は繰り返し強調されている。紀元前457年に始まった250年は、11節から15節に記された最後の二つの代理戦争であるラフィアとパニウムの戦いの中間に当たる紀元前207年に終結した。1776年に始まった地の獣の250年は、地の獣の政治的舞台における「中間選挙」の年である2026年に終わる。ペテロはカイサリア・ピリピ（パニウム）にいるが、それはキリストがただ三人の弟子だけを伴われた三度の機会の中間に当たる。

それらの平行する線の歴史において、ペテロは、ナッシュビルに臨む火の玉の警告を訂正し、かつ繰り返す者たちを表している。ペテロの名は、マタイ十一章から二十二章までのちょうど中間において改められたが、それは、アブラムに関する十一章から二十二章までの中間の章が、契約のしるしとしての割礼を示しているのと同様であり、さらに、黙示録十一章から二十二章までの中間の章が、黙示録十七章における死の契約のしるしを示していることと符合している。中間点とは、十四万四千人がラオデキヤ的な者からフィラデルフィヤ的な者へと変えられるところであり、また三天使の中間は第二天使である。

第二の段階、すなわち中間点は、第一の、かつ基礎的な試みに続く第二神殿の試みの時である。2024年の第一の試みは、ローマの象徴によって外的幻が確立されることであり、第二の試みは、至聖所におけるキリストの内的マラ（鏡）幻である。第二天使の歴史において、真夜中の叫びのメッセージは、第二天使のメッセージに力を与えるために到来する。

1840年のミラー派の歴史において、ジョサイア（「神の土台」を意味する）・リッチは、第一および第二の禍に関するイスラムの預言についての自らの同定を訂正し、1844年には、サミュエル・スノーが、十人のおとめのたとえの成就として、1843年の予測の訂正を行った。2026年のペテロは、1843年のミラー派の失望によって予表されたナッシュヴィルの火の玉に関する失敗した予測を訂正し、また1840年のジョサイア・リッチの働きによって予表されたイスラムのメッセージを調整することになっている。これら二つの18

40年および1844年のミラー派の出来事は、それぞれ1840年8月11日における第一天使のメッセージの力の付与と、1844年8月17日における第二天使のメッセージの力の付与を表している。これらは共に、ナッシュヴィルの火の玉が降下するときの真夜中の叫びの力の付与を示している。

「第三天使の使命の宣言においてこれと結合する天使は、その栄光をもって全地を照らすのである。ここには、世界的規模に及ぶ、かつてない力ある働きが予告されている。1840年から1844年にかけての再臨運動は、神の力の栄光ある顕現であった。第一天使の使命は、世界のあらゆる伝道地にまで携えられ、またある国々においては、十六世紀の宗教改革以来、いかなる地においても見られなかったほどの最大の宗教的関心が呼び起こされた。しかし、これらをも、第三天使の最後の警告のもとに起こる力強い運動が凌駕するのである。」『各時代の争闘』611頁。

問題は、アメリカ合衆国にあるあらゆる都市の中で、なぜ神の摂理がナッシュヴィルを選ばれたのかということである。第三の災いが9月11日に到来したとき、標的となったのはニューヨークのツインタワーとワシントンD.C.のペンタゴンであった。第四の飛行機は地に墜落した。地の獣の象徴は地であり、その経済力の象徴はニューヨークであり、その軍事力の象徴はペンタゴンである。アメリカ合衆国が、世界に対して教皇権の權威の刻印、すなわち獣の像である教会と国家の政治制度を受け入れるよう強制するとき、それはその軍事力と経済力を通して行うのである。なぜなら、黙示録第十三章は、地の獣がその権力を用いて、忠実な者たちが売買することを禁じ、また神の第七日安息日を守る者たちを死に至らせることを明らかにしているからである。この預言的象徴は、ダニエル書十一章四十節において「戦車、騎兵（軍事力）、および船（経済力）」として表されている。

十四万四千人の印する時に、イスラムが思いがけなく栄えの地を四度打つ。第一は9・11であり、第二と第三は、古代の文字どおりの栄えの地、そしてナッシュビルであった。第四は黙示録十一章の地震、すなわち日曜休業令である。バラムと三天使の文脈において、2023年10月7日の二つの打撃とナッシュビルは、神の契約の民の二つの聖書的ぶどう園を表している。

日曜法において教皇制の致命的な傷が癒やされる時、暗黒時代の第二の顕現が始まる。第一の禍いと第三の禍いは同一である。なぜなら、キリストは常に終わりを初めによって例証されるからである。それゆえ、第一の禍いにおけるムハンマドの落ちた星は、底知れぬ穴を開く鍵を回し、その後まもなく、9/11の後には、底知れぬ穴の無神論が黙示録十一章の二人の証人を殺した。日曜法において、教皇制の致命的な傷は癒やされ、カトリック主義の獣は、第八のもの（復活を表す）が成就するという預言的謎を成就する。そのとき、暗黒時代の第二の期間が、バラムの第三の道標として、ろばが語り、再び底知れぬ穴を開く鍵を回すときに始まる。9/11後、無神論、すなわち竜は穴から出て来て、ギリシアの全領域を奮い立たせた最も富める大統領に対して戦った。日曜法において、黙示録第十七章の獣は底知れぬ穴から上って来て、再び闇が太陽を覆い隠す。

なぜナッシュビルなのか。この問いはなお未解決のままである。ナッシュビルは、真夜中の叫びの使命の宣告という短い期間の始まりを示しており、それはイスラムによる予期せぬ破壊的攻撃をもって始まり、同じように終わる。その期間の終わりにおける日曜法は

、合衆国における獣の刻印の強制を表し、また諸都市の破壊の始まりをも表している。「破壊」は、イスラムの預言的特質である。

## 滅び

「一昨々夜、きわめて印象深い光景がわたしの前を通り過ぎた。わたしは巨大な火の玉がいくつかの美しい邸宅のただ中に落ち、それらを瞬時にして破壊するのを見た。わたしはある者たちがこう言うのを聞いた。『わたしたちは、神のさばきが地に下ろうとしていることを知っていた。だが、それがこれほど早く来るとは知らなかった。』また、ほかの者たちは言った。『あなたがたは知っていたのだ！ それなら、なぜわたしたちに告げなかったのか。わたしたちは知らなかった。』至る所で、わたしはこのような言葉が語られるのを聞いた。」『書簡』217、1904年。

## ナイン・イレブン

黙示録の「九・一一」は、イスラムの王国の性質が死と破壊であることを示している。というのも、預言において名は性質を表すからである。

彼らは自分たちの上に王をいただいていた。それは底知れぬ所の御使いであり、その名はヘブライ語ではアバドン、ギリシア語ではアポルオンである。黙示録 9/11。

アバドンは「滅び」または「滅びの場所」を意味し、アポリュオンは「滅ぼす者」を意味する。

「天使たちは四方の風を引き留めているが、それは、荒れ狂う馬がたずなを振り切って解き放たれ、全地の表を駆け巡り、その行く手に破壊と死をもたらそうとしている姿によって表されている。

「永遠の世界のまさに縁にあって、私たちは眠っていてよいのでしょうか。鈍く、冷たく、死んだようであってよいのでしょうか。ああ、私たちの諸教会において、神の民のうちに神の御霊と息吹とが吹き入れられ、彼らが自分の足で立ち、生きる者となることができますように。私たちは、その道が狭く、その門が細いことを理解する必要があります。しかし、私たちがその狭い門を通るとき、その広がりには限りがありません。」 Manuscript Releases, volume 20, 217.

第三の災いとしてのイスラムの道は、バラムとろばの道である。イスラムの怒れる馬の道、すなわちヨハネの争いの四つの風、イザヤの激しい風、そして四方の風から来るエゼキエルの「風」または「息」は、9/11から始まり、「狭い」かつ「まっすぐな」門へと至る道をたどる。その狭い門は、バラムとろばの第三の道しるべである。

主の使いはさらに進み、右にも左にもそれる道のない狭い所に立った。雌ろばは主の使いを見ると、バラムの下に伏した。すると、バラムの怒りは燃え上がり、杖でその雌ろばを打った。そこで主は雌ろばの口を開かれたので、彼女はバラムに言った。「あなたに何をしたというのですか。あなたはなぜ、この三度も私を打たれたのですか。」民数記 22:26-28

イスラムの滅亡における第三の災いの道は、黙示録18:1-3が成就した9/11に始まった。

「さて、わたしが、ニューヨークは津波によって一掃されると宣言した、という言葉が出ていのでしょうか。これは、わたしが決して語ったことのないものです。わたしは、そこに大きな建物が幾階にもわたって建ち上がっていくのを見ながら、こう言いました。『主が立ち上がって地を激しく揺り動かされる時、なんと恐るべき光景が起こることであろうか。その時、黙示録18章1-3節の言葉が成就するであろう。』黙示録第18章全体は、地上にもたらされようとしている事柄についての警告です。しかし、ニューヨークに何が起ころうとしているかに関して、わたしには特に示されている光はありません。ただ、一つ知っているのは、いつの日か、そこにある大建築物が、神の力の転回と覆転とによって投げ倒されるということです。わたしに与えられた光によって、滅びがこの世界にあることを、わたしは知っています。主からのひと言、その力強い御力のひと触れ、それだけで、これらの巨大な構造物は倒れるでしょう。わたしたちには想像もできないほど恐るべき光景が起こるでしょう。」『Review and Herald』1906年7月5日。

問いはなお残る。なぜナッシュビルなのか。ナッシュビルの火の玉は、アドベンチズムの一つの階級が恥を受け、ヨエルによれば「断たれる」預言的状况を表している。他方の階級は、決して恥を受けることがなく、喜びに満たされているものとして描かれている。この預言的な喜びは、ナッシュビルとアメリカ合衆国にもたらされる裁きそのものに対するものではなく、たとえ話の中で油を持つ者たちと油を持たない者たちとの間に示されている立証に対するものである。油には多くの象徴的意味が伴っているが、その主要な意味の一つは真夜中の叫びのメッセージである。そのメッセージは2023年の終わりに漸進的に封印が解かれ始め、それは退けられるか受け入れられるかする知識の増加を表していた。ホセアは、その知識を退ける者たちが神の祭司として退けられることを明確に示している。ペテロは、ナッシュビルの火の玉を理解する時点でレビ記二十三章の構造の中央に位置しており、また三十という数字は祭司たちの象徴である。

わが民は知識がないために滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしもまたあなたを退け、あなたはもはやわたしの祭司となることはない。あなたがあなたの神の律法を忘れたので、わたしもまたあなたの子らを忘れる。ホセア 4:6。

「知識」あるいはその欠如という問題は、ナッシュビルの火の玉の到来に関連する諸真理の一つである。預言的な「知識」あるいはその欠如は、真夜中の叫びの宣布の始まりを画するものであり、その期間は、安息日と日曜日の問題によって表されるように、神の御言葉への従順という問題をもって終結する。キリストは常に、初めをもって終わりを例証される。そして初めにおいて、神の御言葉への従順は、園においてアダムとエバに与えられた警告のメッセージであった。

終末における従順の問題は、もしホワイト姉妹が述べるように「すべての国民が関与する」のであれば、ただ一つの園に限定されることはあり得ない。安息日と日曜日をめぐるとの問題は、園におけるアダムとエバの最初の試験の反復であり、その同じ試験が終末に全世界において繰り返されるのである。その試験はアメリカ合衆国における日曜休業法をもって始まり、それはまた真夜中の叫びの宣布の期間の終わりでもある。

キリストが来られるという警告のメッセージの宣布は、2023年の終わりに始まったイエス・キリストの黙示のメッセージの開封によってもたらされた知識の増加を受け入れた

者たちによってのみ与えられる。知識、あるいはその欠如に関する試験は、ナッシュビル攻撃において最終的に確定する。2023年の開封において始まった三つの試験のうち、リトマス試験は、そのとき開封された預言的メッセージの内に含まれる「知識」である油に基づいている。

封じられていない「知識」は、第三の、かつリトマス試験紙のような試験である油として、人を試し、最終的に明らかにされる。その試験は、従順の試験において終わる真夜中の叫びの使命の宣布の期間を開始する。その従順の試験は、教会を表すエバと、国家を表すアダムの上において成し遂げられる。これら二つの存在の結合は、獣の刻印が強制されるときに最終的に完成する。園における試験は、終わりの時における試験である。それは、教会と国家の結合を伴う、男女のための試験であり、その男女とは一人の男と一人の女である。最終的な従順の試験へと導く、封じられていない警告の使命は、善悪の「知識」の木によって表されている。

ナッシュヴィルは、地の獣の国におけるギリシャ的教育の象徴である。ギリシャ的教育は偽りの教育であり、それは悪しき知識である。他方、善き知識は真の教育である。エレン・ホワイトが参加することに同意した唯一の法人理事会は、ナッシュヴィルに所在するマディソン・カレッジのものであり、ナッシュヴィルは「南部のアテネ」と呼ばれている。ナッシュヴィルは、ギリシャ的教育、すなわち偽りの教育の象徴である。偽りの教育は偽りの知識である。ナッシュヴィルの意義は、ニューヨーク市およびペンタゴンの象徴性と並行している。

これらの事柄については、次の記事で引き続き取り上げる。

## 原稿188、1905年

「私がナッシュビルにいたとき、私は人々に語っていたが、夜の時分に、巨大な火の玉がまさに天から下って来て、ナッシュビルの上にとどまった。その火の玉からは矢のように炎がほとばしり出していた。家々は焼き尽くされ、家々は揺らぎ、倒れていた。私たちの仲間の幾人かがそこに立っていた。『まさに私たちが予期していたとおりだ』と彼らは言った。『私たちはこれを予期していたのだ。』ほかの者たちは苦悶のうちに手をもみ、神に憐れみを求めて叫んでいた。『あなたがたは知っていたのだ』と彼らは言った。『これが来ることを知っていながら、私たちに警告するためにひと言も語らなかったのだ！』彼らは、何一つ告げず、少しの警告も与えなかったことを思っ  
て、ほとんど彼らを引き裂かんばかりであるように見えた。」 Manuscript 188,  
1905.